



## 第八話 土神（どじん）伝説

きつねのおっさんから聞いた話です。それはこの夏も盛りを過ぎた午後、湖のほとりの木陰で彼に将棋の相手をしてもらいながら聞きました。将棋は例の鳥獣駒を使いました。飛車角落ちにあたる龍虎落ちのハンディをもらって臨み、途中までは勝てると思っていたのですが、話に気を取られたのと慣れない鳥獣駒のせいで不本意にも負けてしまいました。さて話の発端は、王将の代わりをしている九尾の狐（きゅうびのきつね）についてたずねたことによります。おっさんは次のような話をしてくれました。

今は昔、この湖からさほど遠くないところに洞穴（ほらあな）があったそうです。そこに土神（どじん）様がすんでいたというのです。小さな神でしたが、足が速く、力持ちで、全身が黒檀の木のように黒く目がぎらぎら光って筋肉隆々でした。日本の神々の相撲大会でも優勝を何度もしたということでした。しかし性格は荒く、近隣の住民からは恐れられていました。

その土神さまのすんでいた洞穴を、みんなは「どじんさまの穴」と呼んで、人間たちは祭りのときに農作物をその穴の入口に供えました。祭りには例によって狐たちも人間に化けてまぎれていました。そしてある夏祭りのとき、どじん様は美しいきつねの娘に一目ぼれしてしまいました。きつねと見抜いていましたが、恋をすると盲目になるのは神も同じです。しかし神とはいえ、あるいは神であったからこそ、その気持ちをこの雌ぎつねに打ち明ける勇気はありませんでした。

そして、その冬、寒さが特に厳しく、雪も深く積もり、狐たちの中には凍え死ぬものもできました。そこできつねの長（おさ）は夜だけ寒さをしのぐためにどじんさまの穴に入ることを許してくれるようお願いしました。神は例のきつねの娘を嫁にしてくれるなら許すと言いました。長は、その娘にはもういいなづけがいるのでほかの娘にしてくれと言うと、その娘でなければならぬと、断られました。

さて、その娘のいいなづけというのは、きつねの中でも大きな体格を持っており、次期の長（おさ）になると目されていた者です。その若いきつねは、自分がどじん様と戦って、どじん様を洞穴から追い出すので、決闘させて欲しいと長に許しを求めました。長はそれを許し、勝ったら長の座を譲るとも言った。

さて狐たちは、決闘の場所として湖のそばの一番高い踊り場のような場所を指定して決闘状をどじんさまに届けました。どじんさまはこれを受けました。

そして、翌朝決闘が行われました。踊り場をはさんで一方の岸辺にきつねたち、他方にどじん様を守護神とあがめるモグラたちが集まり、その他たくさんの動物らも戦いを見守りました。

いいなづけのきつねはどじん様よりも敏捷性は抜群でかつ体も大きかったので、距離を置いて引

っかいたり、たたいたり、足蹴りをしている間は、きつね有利でした。どじん様は雪だまを作ってはきつねに投げつけましたが、簡単によけられてしまいます。石ころがみな深い雪で埋まっていたのがきつねに幸いしました。きつねは飛びけりを繰り返して、何とか、どじんさまを凍った湖に落とそうとしました。どじんさまはその飛びけりを何度か受けてあとずさを余儀なくされましたが、なんとか我慢して、瀬戸際でしのぎ、やがて疲れてきたきつねの体をとらえました。互いに取り組み合いになると、力でまさるとどじんさまが優勢になります。彼はきつねの背骨を折ろうと両手を力みました。しかしきつねにはするどい犬歯があり、これでどじんさまの肩をかんで、彼が痛がってひるむすきにその手から離れました。どじんさまはまたつかみかかりました。その腕力のすごさに恐れ入ったきつねは逃げ始めました。

どじんさまも速いが、きつねも足には自信がありました。きつねは湖の周りを時計回り方向に走って逃げました。それをどじんさまが追います。岩を越え、足が沈む深雪を乱し、いちぢくの木を枝を足場に、風にゆれるぶどうの木のつるを飛び越え、きつねは走りました。この湖は凍っていましたが、湖水が温かいので、氷は薄く、この上を走ることは危険でした（前作「秘密の湖の秘密」参照）。これも逃げるきつねには有利でした。こうして三周目にはきつねとどじんさまの距離は半周近く開きました。

しかしきつねは知っていました。自分は勝たねば負けであることを。逃げて生き延びて恥をさらすより — どじんさまを倒すことがかなわないなら — いっその神の手によって殺されたほうが名誉であることを。

そしてきつねは、三度目に決闘の場所に戻ったときに立ち止まり、追ってくるどじん様をにらみつけました。しかし彼のぎらぎら光る目をまともに見ると、からだが震え始めました。最後の飛びけりに命をかけようと思いました。しかし雪のせいでいつもの必殺のジャンプができないことを知っていました。

「どじんさま、お願いします。もし私が敗れて、あなたが私のいいなずけをおとりになったら、狐たちにどうか洞穴での越冬をもゆるしてあげてください」

そういうときつねはどじん様に飛びけりを見舞いました。しかしどじん様はそれをよけたばかりか、両腕できつねを抱きとめました。そしてそのままひざの上で暴れるきつねを折り曲げました。

きつねは背骨を折られ、息絶えてしまいました。どじんさまはそのきつねの死骸を両手で宙に上げ、凍った湖に投げ入れました。

そして、（いつのまにか人間の姿に変容していた）くだんのきつねの娘を手招きしました。「お

前はもう私のものだ、さあ一緒に洞穴で暮らすんだ。」

するとその雌ぎつねは、両手を広げてどじん様に走り寄り、抱きつくと、「かたきー！」と叫びながらどじんさまもろとも湖に落ちました。そんなに大柄でもないこの雌ぎつねにどうしてそんな力があつたのかは不思議です。とにかくふたりは一体になって湖に落ち、氷を割って沈みました。どじんさまは泳ごうにもぎつねの娘に両腕もろとも抱きつかれて、ついにおぼれました。恋に破れたあわれな土神さまは、水の中に溶けて墨のように広がってしまいました。

その色は永らく湖をおおい、それ以後、それまでは透明だった水がにごったままです。しかし、湖水は肥沃になり水中の生物は外敵から守られ、また食べ物も増え、これによっていままでいなかった種類の動物も湖にやってきました。しかし一方、土神様がなくなった土地のほうでは農作物がとれなくなり、人々が去ってゆき、地は荒れ放題になって今に至っています。

さて、不思議なことにふたりのぎつねの死体はいつまでも浮いてきませんでした。狐たちはもちろん、森の動物たちも、決闘で敗れたぎつねとそのいいなづけを哀れみ、そのせいかこのぎつねたちが合体して神となって飛翔して九尾（きゅうび）のぎつねになったと伝承するようになりました。もちろん他の地方に行くと別の伝説があり、まちまちです。上方（かみがた）の狐たちは、中国の雌狐が日本に来て、美少女に化けて鳥羽上皇をとりこにしたが、それがきゅうびのぎつねになったと言っているらしい。

また動物たちはどじんさまをも哀れみました、特にモグラたちは中秋の名月には土団子を作り、湖水に供え物として沈めています。しかしいつしかどじんさまの洞穴のありかは判らなくなってしまいました。モグラの連中が知っているといううわさですが、彼らはしらを切って、知らないと言います。なんせ彼らはどじんさまを崇拜しているので、どじんさまの聖なる洞穴を守るつもりなのだろうというのが推測です。

ちょうどこの話が終わったときにわたしの九尾のぎつねは逃げ場を失い、詰まされました。今思い返すと、おっさんはどうやら、話が終わるまでは詰まないように駒を手加減して差していたようです。